

## 蘇軾のいびきの詩について

山口 若菜

### 一、はじめに

北宋の文人蘇軾（字子瞻、號東坡、一〇三六—一一〇二）は、「鼻息」という言葉を用いて「いびきをかいて眠る自分自身」を描寫する詩を、計五首作った。そのうちの三首は熙寧六年（一〇七三）から熙寧八年の間に作られ、これは蘇軾が通判として杭州（現浙江省）にあつた三十八歳から、知州事として密州（現山東省）にあつた四十歳までの期間である。また、あとの二首は最晩年の元符三年（一一〇〇）の六月末から七月にかけて作られ、このとき六十五歳の蘇軾は流罪を許された直後で、配流先の海南島から廉州（現廣西壮族自治区）へと向かつていた。三十代後半と最晩年の二つの短期間において、蘇軾が「いびきをかいて眠る自分自身」という詩のモチーフに關心を持っていたことが分かる。このモチーフには二つの奇妙な點がある。まず、いびきは、知識人の文學として長い傳統をもつ「詩」というジャンルで扱うには不相應なほど「俗」な内容であるという點である。にもかかわらず、蘇軾はこれを繰り返し用いている。また、詩中でいびきの音を發する人物が、蘇軾本人であるという點である。

蘇軾のいびきの詩について

蘇軾はいびきを表す際に主として「鼻息」という語を用いる。詩を讀む者はこの言葉に出あうときに、自然と「荒々しい呼吸音」という音聲的な連想を引き出されて衝撃を受ける。そして、いびきを發している存在に注目する。詩の中において、何故いびきが描寫されているのだろうか。詩中でいびきをかいている人物が蘇軾本人であることに、何か意味はあるのだろうか。また、蘇軾の「鼻息」の詩は、その後の詩にどのような影響を與えたのだろうか。本稿では、これらの點について考察する。

なお、蘇軾の詩のテキストは、馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一）に據った。本文中で蘇軾の詩を引用する場合は、原則として『合注』の卷數のみを示した。また、詞のテキストについては、鄒同慶・王宗堂編『蘇軾詞編年校注』（中華書局、二〇〇二）に據り、引用の際には収録卷次と頁數を示した。蘇軾の文章を引用する際には、孔凡禮點校『蘇軾文集』（中華書局、一九八六）の収録卷數を示した。その他のテキストについては、適宜當該箇所を示した。

## 二、蘇軾の「鼻息」と蘇軾以前のいびきの詩

蘇軾は人間が眠っているときのいびきを表す際に、しばしば「鼻息」という言葉を用いる。特に、自分自身のいびきを指して「鼻息」という言葉を用いるとき、蘇軾はこの言葉に特別な感慨を込めているようである。まず、何遜「春渚紀聞」卷六「東坡事實」の「裕陵瞻賢士」の項に引く以下の逸話を見てみよう。

：久之、復謂景文曰、「如某今日餘生、亦皆裕陵之賜也。」景文請其說。云、「某初逮繫御史獄、獄具奏上。是夕昏鼓既畢、某方就寢、忽見一人排闥而入、投篋于地、即枕臥之。至四鼓、某睡中覺有撼體而連語云、學士賀喜者。某徐轉仄問之、即曰「安心熟寢。」乃挈篋而出。蓋初奏上、舒亶之徒、力詆上前、必欲置之死地。而裕陵初無深罪之意、密遣小黃門至獄中視某起居狀。適某晝寢鼻息如雷、即馳以聞。裕陵顧謂左右曰、「朕知蘇軾胸中無事者。」於是即有黃州之命、則裕陵之恕、念臣子之心、何以補報萬一。

(…之を久しくして、復た景文に謂ひて曰く、「某今日餘生あるが如きも、亦た皆な裕陵の賜なり」と。景文其の説を請ふ。云く、「某初め御史獄に逮繫せられ、獄具して奏上す。是の夕昏鼓既に畢はり、某方に寢に就かんとし、忽ち一人の排闥して入り、篋を地に投じ、即ち之に枕臥すを見る。四鼓に至り、某睡中に體を撼かして連語して「學士賀喜」と云ふ者有るを覺ゆ。某徐ろに轉仄して之を問へば、即ち曰く「安心して熟寢せよ」と。乃ち篋を挈げて出づ。蓋し初めて奏上せしとき、舒亶の徒、力めて上前に詆り、必ずや之を死地に置かんと欲す。而るに裕陵初めより深く罪するの意無く、密かに小黃門を遣はして獄中に至りて某の起居の

狀を視しむ。適たま某晝寢し鼻息雷の如し、即ち馳せて以て聞す。裕陵左右を顧みて謂ひて曰く、「朕、蘇軾が胸中に事無き者なるを知る」と。是に於いて即ち黃州の命有れば、則ち裕陵の恕なり、臣子を念ふの心、何を以て萬一を補報せんや。)

蘇軾は元豐二年(一〇七九)七月、文筆によって朝政を誹謗したという廉で逮捕され、御史臺の獄に繋がり調べを受けた。この事件は烏臺詩案と呼ばれる。引用の逸話は、蘇軾自身が後年、獄中での體驗を友人の劉季孫(字は景文)に語ったというものである。蘇軾は、自分が今生き長らえているのは「裕陵」(神宗皇帝)のお蔭である、と感謝の氣持ちを述べ、その理由を語る。その日の取り調べが済んで蘇軾が就寝しようとしたとき、誰かが監獄の扉を押し開けて入って来て、持参した小箱を枕にして寝た。夜中の三時頃、蘇軾はその人に搖り起こされ、「學士、おめでとう」と祝辭を述べられた。意味を尋ねると、「安心してぐっすり寝ていなさい(安心熟寢)」とだけ言い残し、その人は小箱を手を持って出て行った。そして、神宗が密かに獄中の蘇軾の様子を侍従に確かめさせたとき、ちょうど蘇軾は雷のような高いいびきで晝寢をしていた(晝寢鼻息如雷)。そこで侍従はありのままを神宗に報告した。神宗は蘇軾の胸に一物無しと確認できたとして、周圍の者に告げ、蘇軾は死罪を免れた。いびきが熟睡の證據と判断されたためである。「念臣子之心、何以補報萬一」は、わざわざ本心を確かめてくれた神宗の配慮に對する、蘇軾の感動を示す言葉である。この話をするとき、實際に蘇軾は「某晝寢鼻息如雷」と語ったものと考えられる。ここでの「鼻息」は、心にわだかまりの一切無い人間の恬淡たるいびきを指す。

だが、「鼻息」は本來人間のいびきを指す言葉として一般的に使用

されたものではない。蘇軾以前の詩に「鼻息」の用例を求めると、ただ「はないき（＝荒々しい呼吸）」を指すものばかりである。例えば、唐の李白の「古風五十九首 其二十四」（『李太白集』卷二、四部叢刊初編）に、

路逢鬪雞者 路に雞を鬪はす者に逢ふ

冠蓋何輝赫

冠蓋何ぞ輝赫す

鼻息干虹蜺

鼻息 虹蜺を干し

行人皆怵惕

行人 皆怵惕す

とあるが、ここでの「鼻息」は、雞を操る能力で出世した賈昌という人物の、氣負って鼻息が荒い様子を表現している。また、元稹の「八駿圖詩」（『元氏長慶集』卷三、四部叢刊初編）に、

朝辭扶桑底

朝に扶桑の底を辭し

暮宿崑崙下

暮に崑崙の下に宿る

鼻息吼春雷

鼻息 春雷に吼え

蹄聲裂寒瓦

蹄聲 寒瓦を裂く

という「鼻息」は、駿馬の激しい鼻息を指している。同じく元稹「蟬子三首 其三」（『元氏長慶集』卷四）は、序に「蟬、蚊類也。其實黑而小。（蟬は、蚊類也。其の實は黒くして小なり）」というように、蚊の一種についてうたった詩で、ここでの「鼻息」は單に呼吸という意味である。

誰令通鼻息

誰か鼻息を通せしむ

何故辨馨香

何の故に馨香を辨す

それに対し、「鼻息」が眠っている人間のいびきを表す早期の例は、孫樵の文章「乞巧對」（『唐孫樵集』卷七、四部叢刊初編）に見ることができる。

…豫方高枕、偃然就寢、腹搖鼻息、夢到鄉國、槐花撲庭、鳴蜩噪晴…

（…豫方に高枕し、偃然として就寝せんとし、腹搖れて鼻息し、夢に郷國に到る、槐花庭を撲ち、鳴蜩晴に噪ぐ…）

この例では「鼻息」が「高枕」や「就寝」とともに現れ、いびきをかいて眠っている人物、すなわち孫樵自身について述べていることが分かる。

ただし、「鼻息」が眠っている人のいびきを指す詩における用例は、北宋の梅堯臣まで待たねばならない。「乾明院碧鮮亭」（『宛陵先生集』卷三十七、四部叢刊初編）を見てみよう。

細藤織榻白晝眠

細藤の織榻 白晝に眠り

寢濃鼻息如雷吼

寢り濃く 鼻息 雷の吼ゆるがごとし

10 世閒百事不歷心

世閒の百事 心を歷せず

門外寒流徹溪口

門外の寒流 溪口に徹す

この詩で梅堯臣は、自らの晝寝の充足感を述べている。ぐっすりよく眠り大きいいびきをかくのが心地よい。そのときには「世閒百事不歷心」、世の中の煩わしいことを全て忘れることができる。こう述べる際に、「鼻息」という言葉が用いられている。

ところで、「鼻息」に限らず、詩の題材に人間のいびきという題材が取り上げられた先例を求めると、梅堯臣よりも早くには、まず中唐の韓愈の「嘲鼾睡」二首がある。「嘲鼾睡」については後述するが、澹師という人物のいびきの凄まじさについて、おどろおどろしく述べた詩である。詩中でいびきは「聲氣」または「聲」などと書き表される。

また、梅堯臣と同世代の歐陽脩の詩にも、いびきをかいて眠る人物

と周圍の反應が、滑稽味を帯びて描かれている。「有贈余以端谿緣石枕與斬州竹簟、皆佳物也。余既喜睡、而得此二者不勝其樂、奉呈原父舍人・聖俞直講（余に贈るに端谿の緣石枕と斬州の竹簟とを以てするもの有り、皆佳物なり。余既に睡るを喜めば、此の二者を得て其の樂しみに勝へず、原父舍人・聖俞直講に奉呈す）」（『歐陽文忠公集居士集』卷八、四部叢刊初編）の詩である。病氣を理由に閑職を請うて遷った歐陽修が、ようやく大好きな晝寝を堪能できることを喜んだ詩で、詩題から分かるとおり、これは枕と簟とを贈ってくれた人に對する禮狀も兼ねていると考えられる。

15 一從儼舍居城南 一たび儼舍して城南に居してより

官不坐曹門少客 官に坐曹せず 門に客少し

自然唯與睡相宜 自然 唯だ睡りと相宜し

以懶遭閑何愜適 懶を以て閑に遭ふは何ぞ愜適ならん

從來羸茶苦疲困 從來 羸茶 苦だ疲困

20 況此煩歎正炎赫 況んや此の煩歎の正に炎赫なるをや

少壯喘息人莫聽 少壯の喘息は人聽くこと莫きも

中年鼻鼾尤惡聲 中年の鼻鼾は尤も聲惡し

癡兒掩耳謂雷作 癡兒耳を掩ひて雷作ると謂ふ

灶婦驚窺疑釜鳴 灶婦驚き窺きて釜の鳴るかと疑ふ

25 蒼蠅蟻蠓任緣撲 蒼蠅 蟻 蠓 緣撲に任せ

蠹書懶架拋縱橫 蠹書 懶架 縱橫に拋つ

第二十二句に、「中年」に至り疲れ切った自分は大いびきをたてるようになったといひ、「鼻鼾」といふ言葉を用いている。續く二句では「癡兒掩耳謂雷作、灶婦驚窺疑釜鳴」と、子供らや料理女がいびきの騒音に驚いてあたふたする光景を描いていてユーモラスである。

三、不平のいびき——蘇軾の「鼻息」の諸相 (I)

先に見たように、「鼻息」を人間のいびきの意味で詩に用いたのは梅堯臣が初めてである。また、いびきをかいて眠る人物を表現するという詩の題材に關しては、中唐の韓愈の「嘲鼾睡」二首が初めての例である。蘇軾のいびきの詩のうち、熙寧年間に作られた三首は、韓愈の「嘲鼾睡」二首から、いびきにどんなイメージを持たせるかという點において、最も大きな影響を受けている。

まず、韓愈の「嘲鼾睡」二首のうち、其一を見てみよう。

澹師晝睡時 澹師晝睡る時

聲氣一何猥 聲氣一に何ぞ猥なる

頑颺吹肥脂 頑颺肥脂を吹き

坑谷相鬼磊 坑谷相鬼磊たり

雄哮乍咽絕 雄哮乍ち咽絶

每發壯益倍 發する毎に壯にして益ます倍す

有如阿鼻戶 阿鼻戶のごとき有り

長喚忍衆罪 長く喚んで衆罪を忍ぶ

馬牛驚不食 馬牛驚いて食はず

百鬼聚相待 百鬼聚りて相待つ

木枕十字裂 木枕十字裂け

鏡面生疔瘡 鏡面に疔瘡を生ず

鐵佛聞皺眉 鐵佛聞きて眉を皺め

石人戰搖腿 石人戰きて腿を搖かす

孰云天地仁 孰か云ふ天地仁なりと

吾欲責眞宰

幽尋虱搜耳

猛作濤翻海

太陽不忍明

飛御皆情怠

乍如彭與鯨

呼冤受菹醢

又如圈中虎

號瘡兼吮餒

雖令伶倫吹

苦韻難可改

雖令咸巫招

魂爽難復在

何山有靈藥

療此願與探

吾眞宰を責めんと欲す

幽尋 虱 耳を搜り

猛作 濤 海に翻る

太陽明なるに忍びず

飛御皆情怠す

乍ち彭と鯨と

冤を呼んで菹醢を受くるがごとし

又如圈中の虎

瘡に號び兼ねて餓に吮ゆるがごとし

伶倫をして吹かしむと雖も

苦韻改むべきこと難し

咸巫をして招かしむと雖も

魂爽れて復た在り難し

何れの山にか靈藥有らん

此を療せば願はくは與に探らん

澹師という僧のいびきがいかに凄まじいか、さまざまな比喻を用いておどろおどろしく描寫されている。冒頭二句「澹師晝睡時、聲氣一何猥」には、他人のいびきを聞かされる韓愈の不快感が表れている。澹師のいびきは、次第に激化する野獸の叫び（「雄哮」、第五句）のようであり、「有如阿鼻戸」（第七句）というように罪人の絶叫と百鬼の歡聲がこだまする地獄繪圖の音に喩えられるほどで、「木枕十字裂、鏡面生疥癩」（第十一・十二句）と、そこらじゅうのものを壊して駄目にしてしまい、「鐵佛間皺眉 石人戰搖腿」（第十三・十四句）というごとく、決して動じないはずの佛像や石像をも動搖させるのである。谷口匡氏は、「嘲鼾睡」二首を、元和二年（八〇七）當時の韓愈の

心境をよく表わす詩の一例として取り上げ、詩の制作意圖と内容について詳細な分析を加えている。谷口氏によれば、韓愈は「澹師」のいびきを題材に荒唐無稽な戯れの詩を作ったのでは決してなく、自分へのいわれのない蜚語に對する抗議としてこの詩を作ったのであり、詩中で澹師がたてるいびきの騒音は、韓愈に對する悪い評判を象徴するものだ、という。また、「嘲鼾睡」其二の冒頭は、以下のように始まる。

澹公坐卧時

澹公坐卧する時

長睡無不穩

長睡穩やかならざる無し

吾嘗聞其聲

吾嘗て其の聲を聞けば

深慮五藏損

深く慮へて五藏損す

谷口氏は、「吾嘗聞其聲、深慮五藏損」というのは、韓愈が「そうした騒音に深刻に悩んでいるさまを示しているのである」と説明する。韓愈は澹師のいびきを聞かされて悩み、五藏が損壞するほどであるが、一方で、いびきをかいている當の澹師の様子は「澹公坐卧時、長睡無不穩」と、いかにも心地よさげである。しかし、澹師の眠りは安定した正常なものではない。其一の詩において「孰云天地仁、吾欲責眞宰」と、恐ろしい騒音の責めを眞宰に負わせているように、いびきが起ころのは「天地不仁」に原因があるとする。澹師もまた天地の不仁に刺激されて、「雖令伶倫吹、苦韻難可改、雖令咸巫招、魂爽難復在」と、すでに手の施しようがないほど魂を破られ、精神の平衡を失っている。韓愈によれば、いびきとは「不平」の音なのである。韓愈は「送孟東野序」（『朱文公校昌黎先生文集』卷十九）において、以下のように言う。

大凡物不得其平則鳴。草木之無聲、風撓之鳴。水之無聲、風蕩之

鳴。其躍也或激之。其趁也或梗之。其沸也或炙之。金石之無聲、或擊之鳴。人之於言也亦然。有不得已者而后言。其誦也有思。其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎。

(およそ物は平衡の状態を失えば音をたてる(鳴る。)<sup>①</sup>草木はもともと音をたっているわけではないが、風がゆがめかきみだすことによつて音をたてる。水はもともと音をたっているわけではないが、風がゆり動かすことによつて音をたてる。水が勢いよくおどりあがるのは、刺激を受けるからである。堰をきったように流れるのは、塞がれるからである。わきたつのは、熱せられるからである。金石はもともと音をたっているわけではないが、それを打つことによつて音をたてる。人と言葉との關係もまた同様である。やむにやまれぬことがあつてはじめて言葉になるのである。歌うのは考えがあるからである。聲をあげて泣くのは思いがあるからである。口から出て音聲になることの背後には、すべて平衡でない状態があるのである。)

「送孟東野序」の論法を敷衍すると、人のいびきも、世界に何かその人の平衡を失わせる状態があつたとき、文字通り「鳴」つたものだと考えることができるだろう。

右のことが言えるなら、韓愈が、いびきに「不平」の音というイメージを持たせたことになり、そのことに私は注目したい。たしかに、「嘲鼾睡」二首において、いびきは韓愈を妬む他者から韓愈に對して向けられた悪意のこもつた蜚語の象徴であつて、韓愈自身の不平を直接に表すわけではない。しかし、向けられた悪意に對しては「不平」の心が込められており、悪意を向けられる不快に堪えかねてさらに「不平」の詩をもつて返したのが韓愈の「嘲鼾睡」二首である。詩に

「いびき」がモチーフとして使われるということは、その作者には「やむにやまれぬこと」があり、言葉にせずにはいられないということなのである。作者が自らの置かれた状況について何か言わざるを得ないという「不平」を動機として詩を作り、その中に「いびきをかく人物」が象徴的な意味をもつて表れるという初めての例を、韓愈が開いたということになる。

蘇軾は、熙寧年間にいびきの詩を作つた際、韓愈の「嘲鼾睡」に込められた「不平」のイメージを意識していた。それもただ単に意識するだけでなく、いわれのない中傷を受けて苦しんだという點で、蘇軾は韓愈に對して大いに共感するところがあつた。蘇軾の「書退之詩」(『蘇軾文集』卷六十七)という題跋文には、

(前略)：退之得磨蝎爲身宮。而僕乃以磨蝎爲命。平生多得謗譽、殆是同病也。

(自分は韓愈と一緒にサソリ座生まれだが、韓愈と同様にさまざまに毀譽褒貶にさらされるのは、これはもう宿命なのかも知れない。)

と、感慨の意を示している。蘇軾は京師にあつた熙寧三年(一〇七〇)、侍御史知雜事で新法黨の謝景溫によつて、丁憂(蘇洵の喪中)期間中に私鹽を購入し販賣したという彈劾を加えられた。事實無根で罪には問われなかったが、この事件をきっかけに、舊法黨員として京師に居るのは危険な情勢だと判断した彼は、地方官として杭州へ轉出したのである。地方官となつた蘇軾が目にしたものは、新法黨が急ぎ推進する改革についてゆけずに苦しむ民衆の現實だつた。熙寧六年に作られた「佛日山榮長老方丈五絕 其四」(卷十)からは、日頃彼が爲政者の一人として、己の無力さに悩んでいたことが分かる。

食罷茶甌未要深

食し罷って茶甌未だ深きを要せず

清風一榻抵千金

清風一榻 千金に抵る

腹搖鼻息庭花落

腹搖らいで鼻息に庭花落つ

還盡平生未足心

還し盡くす平生未だ足らざるの心を

第三句に「腹搖鼻息庭花落」といい、ここで「鼻息」すなわちいびきをたてているのは、晝寢をしている蘇軾自身である。一見して平和な午後の晝寢を楽しんでいる詩だが、第四句には「還盡平生未足心」とあり、彼は平生心が満たされていないのだということが分かる。心の満たされない部分を心地よい眠りによって全て取り返したのだと言うが、敢えてそのことを詩に強調せずにおれないのは、彼にとって安らかな眠りは滅多に得られないもので、また心やすく眠ることを許さない現状があったからである。そのことを暗示するのが第三句の「鼻息」である。実際には、蘇軾は晝寢後の目覺めの爽やかさが嬉しくてこの詩を作ったに違いない。しかし、心地よく眠る自分自身に敢えていびきの音をたてさせたのは、眠りながらも自然と「不平」の音をたて、社會に働きかけずにはいられない、責任感ある士大夫の自畫像をユーモラスに描き出し、日々心に抱いている政治への批判を含蓄する意圖があったからである。

次に挙げる「宿海會寺」(卷十)でも、蘇軾はいびきに「不平」の音というイメージを持たせる韓愈の作品を意識している。海會寺とは、杭州の西の臨安縣の寺で、施宿の『東坡先生年譜』によれば、この詩も熙寧六年の作である。「佛日山榮長老方丈五絶 其四」との違いは、自分のいびきが周圍を驚かせるという要素が加わっている點である。全十六句の詩は、前半では海會寺に至る道行きを、後半では城塞のような山寺に到着してからの状況を述べるという構成になっている。こ

蘇軾のいびきの詩について

こでは詩の後半八句を引く。

大鐘橫撞千指迎

大鐘横ざまに撞いて千指迎へ

10 高堂延客夜不扃

高堂 客を延いて 夜扃さず

杉槽漆斛江河傾

杉槽 漆斛 江河を傾く

本來無垢洗更輕

本來 無垢 洗ひて更に輕し

倒床鼻息四鄰驚

床に倒れて 鼻息 四鄰驚き

統如五鼓天未明

統如たる五鼓 天未だ明けず

15 木魚呼粥亮且清

木魚 粥を呼んで亮として且つ清し

不聞人聲聞履聲

人聲を聞かず 履聲を聞く

第十二句「本來無垢洗更輕」については、施元之および顧禧の注(以下「施注」)が指摘するように、『維摩經』佛道品にある、

八解之浴池、定水湛然。滿布以七淨華、浴此無垢人。

(八解の浴池に定水湛然たり。滿布するに七淨華を以てし、此の

無垢の人を浴せん。)

という一段を踏まえる。すなわち、蘇軾はこの句において、海會寺で沐浴した自分は「無垢」であると言う。さらに、王狀元注本が引く堯卿の注は、『景德傳燈錄』卷十七の以下の記事を引く。

襄州鷲嶺善本禪師、因入浴室、有僧問、「和尚是離垢底人、爲什麼却浴。」師曰、「定水湛然滿、浴此無垢人。」

(襄州の鷲嶺善本禪師、浴室に入るに因りて、僧の問ふもの有り、「和尚は是れ離垢底の人なるに、什麼の爲に却って浴する」と。師曰はく、「定水湛然として滿つ、浴するは此れ無垢の人なり」と。)

すなわち禪師は、自分は無垢であるからこそここに入浴するのだと、『維摩經』の一段を用いて痛快な反論をしたのである。蘇軾は、一〇

〇四年に道原の手によって成った『景德傳燈錄』を讀み、この出典を踏まえて自らの「無垢」を強調していると考えられる。

さらに、第十三句「倒床鼻息四鄰驚」に蘇軾自身のいびきの様子が描かれるが、施注は韓愈「石鼎聯句詩序」(『朱文公文集昌黎先生文集』卷二十一)を、いびきが周圍を嘩然とさせる状況の例として挙げる。

「石鼎聯句詩序」とは以下のような筋である。

元和七年十二月四日の夜、衡山の道士軒轅彌明は進士の劉師服を訪ねた。そこには校書郎の侯喜という者も來合わせていた。侯喜は近ごろ詩に巧みだとの評を得て、その時も劉師服と詩について論じていた。侯喜は、軒轅彌明が容貌醜く楚訛りで話す様子を見て、彼を輕んじた。それゆえ軒轅彌明は氣分を害し、鑪中の石鼎を指し、侯喜に聯句をしようとして挑戦し、劉、侯、彌明の三人で聯句を始めた。劉と侯とは始め彌明を侮っていたが、逆に全く敵わなかった。劉と侯とが苦吟するのに對し、彌明はやすやすと自然に句を續け、しかも句の内容は二人を嘲弄するものだった。ついに句を續げなくなった二人は彌明に降参し、弟子入りを願ひ出るが、彌明は二人を鼻であしらった。さらに、完成させた聯句については、二人のレベルに合せて作った詩ゆえく知らない出來だと言ひ、自分の本領はこの程度ではないが、君達には理解できるはずもないので自分はもう何も言わないと宣言し、その場で大いびきをかきながら寝てしまひ、一切應答しなかつたという。

軒轅彌明が二人を無視して大いびきで寝るといふくだりの文が、

道士倚牆睡、鼻息如雷鳴。二子怛然失色、不敢喘。

(道士牆に倚つて睡り、鼻息雷鳴のごとし。二子怛然として色を失ひ、敢へて喘がず。)

なのである。施注の指摘するとおりの、蘇軾の「倒床鼻息四鄰驚」一句

は韓愈「石鼎聯句詩序」における軒轅彌明のいびきの逸話を踏まえてゐる。この場合、蘇軾はこの句に以下のような意味を込めたと解釋できる。器の小さい相手と意志を通ずるには、相手が喜んで理解する言葉を用いるよりほかないが、自らの信條として認めるわけにはゆかない。自分は今、言わんとすることを腹に押し込めてゐるが、その志はいびきとなつて自然と鳴り響き、それは地方の山寺からであつても周圍を驚かせるほどの強い批判である、ということである。蘇軾が批判するものは、反對者の存在を許さず排除しようとする新法黨の政治である。蘇軾は政治批判を韜晦し、なおかつ己の志をも示すために、「いびきをかいて眠る自分自身」を敢えて詩に描いたのである。

政治批判を韜晦しきれなかつたいびきの詩が、次に挙げる「次韻劉貢父李公擇見寄二首 其一」(卷十三)である。この詩は蘇軾が知密州の任にあつた熙寧八年の作であり、後に「譏諷朝廷」の證據として彼の裁判記録である『烏臺詩案』に採られた。

白髮相望兩故人 白髮相望む兩故人

眼看時事幾番新 眼に看る時事の幾番か新たなるを

曲無和者應思郢 曲は和する者無く應に郢を思ふべし

論少卑之且借秦 論は少しく之を卑しくして且く秦を借れ

05 歲惡詩人無好語 歲惡しくして詩人 好語無し

夜長鏢守向誰親 夜長くして 鏢守誰に向かつて親しまん

少思多睡無如我 思ひ少なく睡り多きは我に如くは無し

鼻息雷鳴撼四鄰 鼻息雷鳴して四鄰を撼かす

『烏臺詩案』の内容は、御史が蘇軾にかけた壓力と切り離して考えることはできない。だが、この詩の解釋については、新法に批判的だといふ點で共通する友人に、本心を吐露したと受け取るのが自然であ



る。『烏臺詩案』によれば劉攽（字は貢父）と李常（字は公擇）の詩それぞれに次韻したものだというのが、劉攽も李常も共に新法を批判して左遷された人物である。第二句「眼看時事幾番新」は、新法黨政府が頻繁に法を改めることを指している。第三句「曲無和者應思郢」は、『文選』卷四十五に收められる宋玉の「對楚王問」にいう、郢において俗な歌は和する者が多いが立派な歌になればなるほど和する者が少なくなるという話に基づくもので、具體的には熙寧四年に神宗が科擧における詩賦の試験を廢止したことを指す。蘇軾は詩賦試験の廢止に反對で、熙寧四年には「議學校貢擧狀」（『蘇軾文集』卷二十五）を上って神宗を諫めている。また、第四句「論少卑之且借秦」は、新法黨の主導によって、現實の政治に對する實踐的な論文ばかりが重視され、詩文など實務能力と關わりのない論は顧みられなくなったことを言う。第五句「歲惡詩人無好語」は、民の事情を解しない強引な政治のもと、折しも災害や盜賊の害に人々が苦しめられていたことを批判する。七八句の「少思多睡無如我」は、日頃思うところが澤山あることの裏返しであり、「鼻息雷鳴撼四鄰」は先に見た「宿海會寺」詩と同様、言わんとすることを腹に押し込めても、社會の現状を憂うる士大夫の志はいびきとなって自然と鳴り響き、必ずや周圍を驚かせてその注意を喚起するということである。實際、蘇軾は筆禍事件に遭ったので、この詩は充分に「撼四鄰」したことになる。「いびきをかいて眠る自身」というモチーフに政治批判をうまく韜晦しきれなかったが、「不平」の音として注目を集めた點において、この詩は成功をおさめた。

して、言うべきことはたとえ明言することが憚られる情勢であっても主張せざるを得ない、という姿勢を示すためである。韓愈の詩と明らかに異なるのは、詩中でいびきをかくのが蘇軾自身であって他人でないことである。また、「宿海會寺」の「倒床鼻息四鄰驚」や、「次韻劉貢父李公擇見寄二首 其一」の「鼻息雷鳴撼四鄰」は、歐陽修の詩に見た「癡兒掩耳謂雷作、灶婦驚疑釜鳴」に近い表現である。おそらく蘇軾は、眠っている自分自身が巻き起こす騒動を表現するに際し、師の歐陽修の詩のユーモアからヒントを得たであろう。蘇軾の熙寧年間における「鼻息」の詩は、韓愈に倣った「不平」の象徴としてのいびきを、歐陽修に學んだ諧謔の表現で包んだものである。

#### 四、恬淡のいびき——蘇軾の「鼻息」の諸相 (II)

蘇軾は、熙寧年間の詩三首の後、二十五年にわたって「鼻息」の詩を作らなかつた。次に「鼻息」の詩が現れるのは元符三年（一一〇一）、最晩年の六十五歳の時である。晩年の二首について注目すべき點は、熙寧年間の「鼻息」が持っていた「不平」というイメージが拂拭され、うららかな心で熟睡する状態を象徴する「安心熟寢」のいびきへとイメージが變化している點である。空白の二十五年の間に、蘇軾の身は浮沈を繰り返した。元豐年間には烏臺詩案を経て黃州へ流罪となり、五十歳代には所謂「元祐の更化」で一度は中央政治に復歸した。だが知杭州の職を願って京師を離れた後、新法黨勢力の復活にしたがって次第に南方へと貶謫せられ、果ては海南島まで流された。二十五年の間に、蘇軾の心境に大きな變化のあったことが分かる。もっとも詩ではなく詞に、「鼻息」という言葉が現れるものが一首ある。元豐六年

(一〇八三) 四月、蘇軾が罪人として黃州にあった時の詞「臨江仙」(中冊、四六七頁)を見ておこう。前闕を引く。

夜飲東坡醒復醉

歸來髣髴三更

家童鼻息已雷鳴

敲門都不應

倚杖聽江聲

夜東坡に飲んで醒めて復た酔ふ

歸り來れば髣髴として三更なり

家童の鼻息 已に雷鳴し

門を敲けども都て應ぜず

杖に倚りて江聲を聽く

烟で少し酒を飲んでから日付の變わる頃に歸宅してみると、ボーイは既に主が戻ったのにも氣付かぬほど熟睡して高いびきであった、という情景である。この「鼻息」は「家童」のものであり、他者のいびきを描寫している點では先の蘇詩三首と異なるが、「鼻息」が無防備な熟睡状態を示すものとして表現されている點に注目したい。元豐六年の時點で、「鼻息」に込められていた「不平」のイメージは既に無くなっている。

蘇軾の心境の變化は、彼の獄中での體驗と關わっているのではないかと私は考える。先述の『春渚紀聞』の逸話において、諜報員らしき人物が蘇軾の起居を監視していた。もし獄中の蘇軾に皇帝への謀反の念ありと判断されれば、彼はすぐに處刑されたのだろう。だが蘇軾は不審な様子もなく取り調べに應じ、自ら詩に「少思多睡無如我、鼻息雷鳴撼四鄰」とうたったとおりの姿で眠っていた。「次韻劉貢父李公擇見寄二首 其一」は『烏臺詩案』に採られた詩であり、すなわち神宗もこの詩を知っていた。『春渚紀聞』において箱を提げた人物が「學士賀喜」「安心熟寢」と告げたというのは、蘇軾の詩は事實をそのまま述べたものとして好意的に解釋しよう、という意味を皇帝が示したという意味だと考えられる。蘇軾が『春渚紀聞』の記事にある内容

を語ったのは、おそらく元祐六年(一〇九二)頃のことだろう。というのは、彼は潁州に在ったこの時期に、ちょうど聞き手の劉季孫と頻繁な交流があったためである。蘇軾の「鼻息」は烏臺詩案を境に、文字通りの「安心熟寢」に直結するものとなった。

元符三年の詩二首を見てみよう。この年、彼は罪を許され、海南島から廉州(現在の廣西壯族自治區)へ移れとの命を受け、六月に出發して瓊州海峡を渡った。「自雷行廉、宿興廉村淨行院」(卷四十三)は、海を渡った蘇軾が、廉州へ向かう途中に淨行院という小さな山寺に立ち寄って休んだことを述べた詩である。傳藻の『東坡紀年錄』によれば、興廉村の淨行院に立ち寄ったのは六月二十五日のことである。

荒涼海南北

佛舍如雞棲

忽行榕林中

跨空飛棋枰

05 當門冽碧井

洗我兩足泥

高堂磨新磚

洞戸分角圭

倒床便甘寢

鼻息如虹霓

童僕不肯去

我爲半日稽

晨登一葉舟

醉兀十里溪

15 醒來知何處

荒涼たり海の南北

佛舍 雞棲のごとし

忽ち榕林の中を行けば

空に跨って棋枰を飛ばす

門に當って碧井冽たり

我が兩足の泥を洗ふ

高堂新磚を磨し

洞戸角圭を分つ

床に倒れて便ち甘寢し

鼻息 虹霓のごとし

童僕 肯へて去らず

我れ 半日の稽を爲す

晨に一葉の舟に登り

醉兀 十里の溪

醒め來たりて 知るや何れの處ぞ

歸路老更迷

歸路 老いて更に迷ふ

睡眠中の蘇軾自身が描寫されているのは第九句から第十二句の「倒床便甘寢、鼻息如虹霓、童僕不肯去、我爲半日稽」で、自分は大いびきで氣持ちよく眠っているが、傍らのボーイは特にその音に驚いて逃げ出すこともなく、半日休憩したという。いびきをかいて眠る自身自身を題材として詩に描寫するという基本そのものは、熙寧年間の三首の詩と變わらない。だが、この詩においては、付き添いの者を驚かせ混亂させるような諧謔性は無く、同時に不平の要素もない。第十句の「鼻息」は第九句の「甘寢」と對になっており、蘇軾が自然に熟睡できている状態にあることを示している。詩中にいびきの音が示されてユーモラスであり、全體として心のどかな午睡の情景を描いている。「鼻息」自體、周圍に溶け込むような音であって、不快感をともしなう雑音ではないのである。

次に擧げる「歐陽晦夫惠琴枕」(卷四十三)は、「鼻息」の表現を用い、熟睡の自然さをより強調して表した詩である。これは蘇軾が廉州に到着してから約一週間に作られた詩で、彼の睡眠中のいびきが、古代の名曲の音律に正しく合致していると述べる。

- 05 中郎不眠仰看屋 此の古椽圍尺の竹を得たり
- 得此古椽圍尺竹 輪困漣落非笛材
- 輪困漣落非笛材 剖作袖琴徽軫足
- 剖作袖琴徽軫足 流傳幾處到淵明
- 流傳幾處到淵明 臥枕綸巾酒新漣
- 臥枕綸巾酒新漣 孤鸞別鶴誰復聞
- 孤鸞別鶴誰復聞 鼻息駒駒自成曲
- 鼻息駒駒自成曲

- 中郎眠らず 仰いで屋を看
- 此の古椽圍尺の竹を得たり
- 輪困漣落 笛材に非ず
- 剖きて袖琴を作して徽軫足れり
- 幾處に流傳して淵明に到り
- 臥して綸巾に枕し 酒新に漣す
- 孤鸞別鶴 誰か復た聞かん
- 鼻息駒駒 自ら曲を成す

蘇軾のいびきの詩について

蔡邕のように音律を知る人が眠らずに屋根を仰ぎ見て、古い椽から周圍一尺もあるこの竹を見つけた。だが太すぎる。うえ穴も大きすぎて笛を作るには向かないので、割いて小振りの琴をつくり、糸を張り琴柱を立てた。これが何箇所かに流轉したのち陶淵明のような私のもとへ来たので、酒を漉したばかりの頭巾も脱がずこれに枕したりする。「孤鸞」や「別鶴」といった名曲はもう聴くことができないうが、かわりに私の大いびきがゴウゴウとわかって演奏をしている。

第七句について、王狀元注本に引く趙次公の注は、「孤鸞、別鶴は、古琴の名曲なり」という。第五句では「流傳幾處到淵明」と自らを陶淵明に比しているが、「孤鸞」「別鶴」という曲名も陶淵明の詩を踏まえている。「孤鸞」「別鶴(別鶴)」は、「擬古」其五において、

知我故來意 我の故に來たる意を知り  
取琴爲我彈 琴を取りて我が爲に彈ず

上弦驚別鶴 別鶴に驚き  
下弦操孤鸞 孤鸞を操る

と、陶淵明がわざわざ會いに行つた東方の隱士が淵明のために演奏した古い琴の名曲の名であるとおり、孤高の隱士の比喩である。淵明の句を踏まえたうえで「孤鸞別鶴誰復聞、鼻息駒駒自成曲」というとき、蘇軾は、自分の志の表れであるいびきの音は、淵明が尊敬した孤高の隱士による演奏に勝るとも劣らないものだと言っている。結句の「鼻息駒駒自成曲」については、さらに、施注が引く唐の段成式の「西陽雜俎」(續集、卷三、四部叢刊初編)の記事を踏まえている。

許州有一老僧、自四十夏已後、每寐熟即喉聲如鼓篋、自成韻節。許州伶人伺其寢、即譜其聲。按之絲竹、皆合古奏。僧覺亦不自知。二十餘年如此。

(許州に一老僧有り、四十の夏より已後、寐熟する毎に即ち喉聲鼓篋の如く、自ら韻節を成す。許州の伶人其の寝を伺ひ、即ち其の聲を譜す。之を絲竹に按ずるに、皆古奏に合す。僧覺むるも亦た自ら知らず。二十餘年此くの如し。)

この許州の老僧は、自分では氣付かないうちにいびきをかき、しかもその音が古代の音律に合致していることを、音楽の専門家である樂人によって證明された。蘇軾はこの話を踏まえ、それならば自分が睡眠中に自然と鳴らしているいびきの音もまた、許州の老僧のそれと同様に高尚な音楽だと自贊していることになる。熟睡中の人が、自分のいびきを意識して聴くことはない。したがって、熟睡していたはずの蘇軾が自分のいびきがどんな音であるかを得意氣に論じること自體、まずユーモラスである。肯えて自分の「鼻息」の長所について語ってみせるといふ屈託の無さが、彼のうらかな心境と眠りの自然さを證明している。

### 五、詩語「鼻息」の展開

蘇軾は、晩年に作った二首の詩で、詩中の人物のいびきを指す「鼻息」のイメージを「不平」から「安心熟寝」へと修正した。蘇軾が詩に用いた「鼻息」は、彼が詩を作るそばから同時代の文人たちに吟味されつつ採り入れられ、さらに、蘇軾の文學に學んだ後人に受け継がれていった。

例えば、蘇軾の弟である蘇轍(字は子由、號は穎濱または樂城、一〇三九—一一二二)の、「和王適炙背讀書」(『樂城集』卷十二、四部叢刊初編)という詩を擧げる。これは、元豐六年(一〇八三)秋の作で、先に擧げた蘇軾の詞「臨江仙」が作られたのと同じ年である。

少年讀書處

寒夜冷無火

老來百事慵

炙背但空坐

眼昏愁細書

把卷惟恐卧

寒衣補故褐

家釀熟新糯

微微窗影斜

暖暖雲陰過

昏然偶成寐

鼻息已無奈

兒童更笑呼

書冊正前墮

衰懶今自由

不復問冬課

少年讀書する處

寒夜冷やかにして火無し

老來 百事慵し

背を炙りて但だ空しく坐す

眼昏くして細書を愁ひ

卷を把りて惟だ卧すを恐る

寒衣故褐を補ひ

家釀新糯熟す

微微として窗影斜めに

暖暖として雲陰過ぐ

昏然として偶たま寐を成し

鼻息已に奈ともする無し

兒童更ごも笑ひて呼び

書冊正前に墮つ

衰懶 今自ら由り

復た冬課を問はず

若い頃讀書にはげんだ場所では寒い夜に火の氣もなかったが、年をとった今はすべてが氣急ぐ火を背にしてぼんやりと座っている。眼がよく見えず細かい文字にうんざりし、書卷を手にとつては倒れて眠ってしまったわないかと氣遣う。薄い服をはおって古い服を補い、自家製酒をつくるための糯米も實っている。かすかな枝の影が窓に映って斜めに、薄暗く雲の陰が通り過ぎる。朦朧としていつの間にか眠りに落ち、いびきはもうどうしようもない。子供たちは代わる代わる笑って呼び合い、書卷は眞正面に落ちた。老い衰えて氣怠いのを言い譯にして、冬の仕事をしないの言うまでもない。

十一・十二句に「昏然偶成寐、鼻息已無奈」、眠りに落ちたとき自然に發せられるいびきを自分ではどうしようもないと言ひ、「鼻息」の語が用いられている。續く二句では「兒童更笑呼、書冊正前墮」と、いびきの音を背景に、周圍の光景が描かれる。子供たちが可笑しがつて呼び合ったり、いつの間にか本を落としたまま眠りこける怠そうな自身の様子を書き込むのは、歐陽脩と蘇軾の延長上にあるユーモアの表現と言える。ただ、この詩における「鼻息」は、蘇軾の詩に見たほど特別な意味を持たない。蘇轍のこの詩の主題は、慵さにまかせて閑を満喫するというもので、概ね白居易以來の閑適詩の系譜と言えるだろう。ただ、詩の中にいびきをかく自身を登場させ、「鼻息」という言葉が採用されていることには注意しておきたい。さらに、蘇轍は崇寧三年（一一〇四）にも、「鼻息」を用いた「葺東齋」（樂城後集）

卷三、四部叢刊初編）詩を作っている。

敝屋如燕巢

歲歲添泥土

泥多暫完潔

屋老終難固

05 况復非吾廬

聊爾避風雨

圖書易新幌

几杖移故處

宵眠不擇安

10 鼻息若炊釜

兒孫喜相告

定省便蚤莫

敝屋燕巢のごとく

歲歲泥土を添ふ

泥多くして暫く完潔

屋老いて終に固め難し

況んや復た吾が廬の

聊かも爾が風雨を避くるに非ざるをや

圖書新に幌を易へ

几杖 故處を移す

宵眠擇ばずして安んじ

鼻息炊釜のごとし

兒孫喜びて相告げ

定省 便ち蚤莫

蘇軾のいびきの詩について

我生溪山間

弱冠衡茅住

生來乏華屋

所至輒成趣

苦恨無囊金

莫克償地主

投老付天公

20 著身豈無所

我れ溪山の間に生まれ

弱冠にして衡茅に住む

生來華屋之しきも

至る所輒ち趣を成す

苦だ恨む囊金無きを

地主に償ふを克くする莫し

投老 天公に付き

身を著くるに豈に所無からん

私の破れた家はツバメの巢のように、年ごとに泥土が積み重なってゆく。ツバメの巢は泥が多ければ暫くの閑とても清潔だが、巢が古くなるに固めにくくなってしまふ。ましてや私の家はおまが風雨を避けるのに少しも役立たないから尙更だ。書物は新しく表紙をとりかえて、机とひじかけを移動させる。夜の眠りはどこであっても安らかで、いびきは釜の飯を炊いでもいるようだ。子孫は喜んで聲を掛けあい、明け暮れよく世話をしてくれる。私は山谷の間に生まれ、二十歳にはもう隱居の草舎に住んでいた。生まれてこのかた立派な御殿とは無縁だが、至る先々で趣を味わえる。恨めしいのは金缺病で、地主に地代を支拂えないこと。老年に至って天を頼みとすれば、どこでもこの身を落ち着かせられる。

隱居の閑雅な悟りの境地を述べた詩で、「宵眠不擇安、鼻息若炊釜」という安心した作者の熟寝のいびきが、詩の全體に違和感なく溶け込んでいる。蘇軾の場合、彼の個人的な體驗から「鼻息」に持たせるイメージを途中で變化させた。一方蘇轍は、特に「安心熟寝」する人物のいびきという意味でのみ、詩語としての「鼻息」を繼承したことが分かる。

次に、元祐以來蘇軾と親しかった友人の李之儀（字は端叔、號は姑溪居士、一〇四八〜一二二八？）の詩を見る。彼は、「首夏」〔全宋詩〕卷九七二」という詩の中で「鼻息」を用いている。

嬌紅掃盡緣陰成

嬌紅掃き盡きて緣陰成り

便覺庭虛暑氣生

便ち覺ゆ庭虚にして暑氣生ずるを

旋拂藤床方竹枕

旋ち藤床を拂ひ方に竹に枕せんとす

不妨鼻息作雷鳴

鼻息の雷鳴を作すを妨げず

あでやかな紅い花が一扫されて縁樹の陰ができると、こんどは庭ががらんとして夏の暑さを感じるようになった。すぐさま藤の寢床を拂って竹を枕にし、いびきが雷鳴のような轟音をたてるにまかせろ。

静かな庭を自らのいびきの音で獨占しながら午睡を満喫するというのが、蘇軾の「佛日山榮長老方丈五絶 其四」と共通する。だが、李之儀の詩は徹底して爽やかな初夏の晝寝の楽しみを述べた七言絶句である。また、彼の詩には「清風」も「庭花」も無く縁の暑氣に淀んだような木陰の静けさと、「鼻息」の音のコントラストが際立っている。李之儀も蘇轍と同様、悠々とした「安心熟寝」のイメージとしての「鼻息」を採用したことが分かる。

また、蘇軾の影響を強く受けたとされる汪藻（字は彦章、一〇七九〜一一五四）も、「大熱行旌德山中不可車馬步至凌氏林亭詩（大熱行旌德山中は車馬すべからず、歩いて凌氏の林亭に至る詩）」詩（『浮溪集』卷二十九、四部叢刊初編）の中で「鼻息」を用いる。詩の一部を引用しておく。

庭空燕雀乳

庭空に燕雀乳ひ

樹老莓苔封

樹老いて莓苔封づ

露泣過牆竹

露泣りて牆竹を過ぎ

10 風凄横澗松

風凄く澗松を横ぎる

欣然曲肱卧

欣然として肱を曲げて卧し

鼻息春醅濃

鼻息す 春醅濃し

庭はがらんとして燕や雀が子育てをしており、樹木は老いて一面苔に覆われている。露は流れ出て垣根の竹を過ぎ、風ははげしく吹いて澗の松の横を通る。心地よく肘枕で眠り、私がいびきをかくのは春の強い濁酒のため。

この詩では、晩春の庭の景に溶け込んだ作者が、悠々と晝寝をしながら「鼻息」をしている。李之儀の詩と同様、暖かな午後の情趣を切り取った一場面を描いているのであり、ここでの「鼻息」はもはや氣樂な午睡にお決まりの風物の一つとして扱われている。ここに至って「鼻息」という言葉からは、音聲的なインパクトや荒々しい俗臭はおろか、特有の滑稽味すらも剥ぎ取られている。そして、安心した熟睡状態とイコールの關係で結ばれ、通常の詩語として用いられる穩やかな言葉として定着しているのである。このことは、南宋の楊萬里が「鼻息」を詩に用いている事實を傍證とすることができよう。

楊萬里は、作詩の際に注意深く來歴の確かな俗語を選択する詩人である。「春夜孤坐三首 其一」〔誠齋集〕卷十二、四部叢刊初編）詩を見てみよう。

兒女駒駒鼻息聲

兒女 駒駒 鼻息の聲

虛堂誰伴一先生

虛堂 誰か伴ふ 一先生に

春寒夜靜燈花落

春寒 夜靜かに 燈花落つ

數盡殘更睡不成

殘更を數へ盡くして 睡成らず

子どもたちは熟睡してごうごうと大いびき、うつろなこの部屋に誰が私と一緒にいようか。春の寒さのなか夜は靜かで燈心が花形に燒け

落ちてゆく、明け方の四時まで数え終わったのに私はまだ寝付けない。深夜に子どもたちが無心に熟睡している様子を「兒女駒鼻息聲」と、駒鼻たる「鼻息」で表現している。静かな環境と人間のいびきである「鼻息」とが無理なく融合し、詩人を取り巻く穏やかな時間の流れを表現している。

## 六、おわりに

蘇軾は人間のいびきを表す詩語として「鼻息」を選択した。特に、「鼻息」という言葉で自分自身がいびきをかいて眠る様子を描いた詩を五首作った。この五首という数は、彼の先人が作りたいびきの詩と比較して多いと言える。そのうち熙寧年間の三首は、豪快ないびきの轟音に自らの「不平」の気持ちを鞘晦させるユーモアの表現として「鼻息」を用いたものである。しかし、烏臺詩案の後に新生できたことを喜んだ彼は、「鼻息」に持たせるイメージを自ら改めた。晩年、元符年間の二首において、蘇軾の「鼻息」は自然な生の必然とも言うべき「安心熟寝」に伴ういびきを表している。以後、蘇軾の詩友と後継者たちは、人が安心して熟睡するときの呼吸音を示す言葉として、「鼻息」を詩に採り入れていった。いびきそのものは、本来詩に多くは取り上げられない俗な題材であった。また、「鼻息」という言葉は、元來人のいびきを指す詩語としては一般的でなかった。しかし、蘇軾がこの題材と言葉を肯えて選擇して提示したことによって、その後の詩人も自然な熟睡の象徴として詩に用いるようになり、「鼻息」が本来持っている俗臭と音聲的な衝撃は薄らいでいった。そして、南宋までには受け容れやすい詩語の一つとして定着した。「鼻息」は、身近で日常的なワンシーンの中から蘇軾によって選擇され、宋詩の流れの

蘇軾のいびきの詩について

なかで詩語に昇格した言葉の具體的な一例と言えるだろう。

注

- (1) 何遠「春渚紀聞」については『學津討原』本、および張明華點校『春渚紀聞』（唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九八三）を参照した。
- (2) 孫樵は、字は可之。韓愈のもとで學び、大中年間（八四七—八五九）に進士にあげられた。
- (3) なお、「嘲鼾睡」は韓愈の作ではないとの論があるが、従わない。周紫芝「竹坡詩話」には、「世所傳退之遺文、其中載「嘲鼾睡」二詩、語極怪譎。退之、平日未嘗用佛家語作詩。今、云「有如阿鼻尸、長喚忍象罪、其非退之作決矣。又如「鐵佛聞鐵屑、石人戰搖腿」之句、大似鄙陋。退之、何當作是語。小兒輩亂真、如此者甚衆。烏可不辨。」という一條があり、「嘲鼾睡」が韓愈の作であることを否定し排斥する。しかし何孟春は、「退之「嘲鼾睡」二詩、竹坡周少隱、謂其怪譎無意義、非退之作。春以爲、不然。此張籍之所謂駁雜者。退之、特用爲戲耳」と述べ、韓愈の詩であるともみなしている。ここでは何孟春に従い、韓愈の作品として扱う。
- (4) この詩の制作年について、四部叢刊本の注に「嘉祐四年」とある。嘉祐四年（一〇五九）の作であれば、歐陽修は五十三歳、給事中、知制誥、史館修撰などの職にあった。なお、詩の第七句から第十二句には、「憶昨開封暫陳力、屢乞殘骸避煩劇、聖君哀憐大臣閔、察見衰病非虛飾、猶蒙不使如罪去、特許還官還舊職」と煩忙の職の苦痛を述べている。
- (5) 「嘲鼾睡」二首 其「一」の原文は、『朱文公校昌黎先生文集遺文』卷一、四部叢刊初編に據った。訓讀は、送り假名の表記の一部を除き、久保天隨譯『韓退之全集』（續國譯漢文大成、日本圖書センター、一九七八）に據った。なお、「嘲鼾睡」二首 其「二」冒頭四句の訓讀および解釋につ

いては、後掲注(6)の谷口匡氏の論文に従った。

- (6) 谷口匡「張中丞傳後敘」と韓愈の立場」『筑波中國文化論叢』9 一九八九

- (7) 韓愈「送孟東野序」の解釋は、大木康「不平の中國文學史」(筑摩書房、一九九六)二二頁・二三頁に據った。

- (8) 李燾撰『續資治通鑑長編』卷二百十四、神宗熙寧三年に、以下の記事がある。「詔江淮發運、湖北運司體量殿中丞、直史館蘇軾居喪服除往復賈販、及令天章閣待制李師中供料照驗見軾妄冒差借兵卒事實以聞、侍御史知雜事謝景溫劾奏故也。景溫與王安石連姻、安石實使之。窮治、卒無所得。軾不敢自明、久之、乞補外。上批出與知州差遣、中書不可、擬令通判潁州、上又批出改通判杭州。」(中華書局、一九九二、第九冊、五二〇一頁)

- (9) 蘇軾は熙寧四年(一〇七二)の十一月二十八日に杭州通判に着任した。そして、熙寧五年には、「鴉種麥行」「畫魚歌」「吳中田婦歎」(すべて『合注』卷八)など社會の有様を諷刺する詩を作っている。「鴉種麥行」には見回りに来るだけで役に立たない勸農の使者が描かれ、「畫魚歌」は民に重税を課し厳しい刑罰で臨む政府を比喻によって諷した詩、「吳中田婦歎」は凶作にもかかわらず税金を納めて困窮する農婦をうたった詩である。

- (10) 韓愈「石鼎聯句詩序」原文。「元和七年十二月四日、衡山道士軒轅彌明、自衡下來、舊與劉師服進士、衡湘中相識、將過太白、知師服在京、夜抵其居宿、有校書郎侯喜、新有能詩聲、夜與劉說詩、彌明在其側、貌極醜、白鬚黑面、長頸而高結、喉中又作楚語、喜視之若無人、彌明忽軒衣張眉、指鑪中石鼎、謂喜曰、子云能詩、能與我賦此乎、劉往見衡湘間人說、云年九十餘矣、解捕逐鬼物、拘囚蛟螭虎豹、不知其實能否也、見其老、頗貌敬之、不知其有文也、聞此說大喜、即援筆題其首兩句、次傳於喜、喜踴躍、即續其下云云、道士啞然笑曰、子詩如是而已乎、即袖手

聳肩、倚北牆坐、謂劉曰、吾不解世俗書、子爲我書、因高吟曰、龍頭縮菌蠢、豕腹漲彭亨、初不似經意、詩旨有似譏喜、二子相顧慙駭、欲以多窮之、即又爲而傳之喜、喜思益苦、務欲壓道士、每營度欲出口吻、聲鳴益悲、操筆欲書、將下復止、竟亦不能奇也、畢即傳道士、道士高踞大唱曰、劉把筆、吾詩云云、其不用意、而功益奇、不可附說、語皆優劉侯、喜益忌之、劉與侯皆已賦十餘韻、彌明應之如響、皆頌脫含譏諷、夜盡三更、二子思竭不能續、因起謝曰、尊師非世人也、某伏矣、願爲弟子、不敢更論詩、道士奮曰、不然、章不可以不成也、又謂劉曰、把筆來、吾與汝就之、即又唱出四十字爲八句、書訖使讀、讀畢謂二子曰、章不已就乎、二子齊應曰、就矣、道士曰、此皆不足與語、此寧爲文邪、吾就子所能而作耳、非吾之所學於師而能者也、吾所能者、子皆不足以聞也、獨文乎哉、吾語亦不當聞也、吾閉口矣、二子大懼、皆起立牀下拜曰、不敢他有問也、願聞一言而已、先生稱、吾不解人閒書、敢問解何書、請聞此而已、道士寂然若無聞也、累問不應、二子不自得、即退就座、道士倚牆睡、鼻息如雷鳴、二子怛然失色、不敢喘、斯須曙鼓鑿鑿、二子亦困、遂坐睡、及覺日已上、驚顧覺道士不見、即問童奴、奴曰、天且明、道士起出門、若將便旋然、奴怪久不返、即出到門覓、無有也、二子驚惋自責、若有失者、聞遂語餘言、餘不能識其何道士也、嘗聞、有隱君子彌明、豈其人耶、韓愈序。」

- (11) 朋九萬撰『東坡烏臺詩案』の「與劉攽通判唱和」の條に以下のように言う。「熙寧六年九月内、軾和劉攽寄秦泰字韻詩云、「白髮相望兩故人、眼看時事幾番新」以譏諷朝廷。近日更立新法、事尤多也。」(『函海』第一函所收、二十四葉)

- (12) 本文「楚襄王問於宋玉曰、「先生其有遺行與?何士民庶庶不譽之甚也?」宋玉對曰、「唯、然、有之。願大王寬其罪、使得畢其辭。客有歌於郢中者、其始曰「下里巴人」、國中屬而和者數千人。其爲「陽阿薳聲」、國中屬而和者數百人。其爲「陽春白雪」、國中屬而和者不過數十人。引商刻



羽、雜以流徽、國中屬而和者不過數人而已。是其曲彌高其和彌寡。故鳥有鳳而魚有鯢。(後略)(宋玉「對楚王問」)

(13) 錢鍾書『宋詩選註』(人民文學出版社、一九五八)一二二頁に、「從他(汪藻)的作語看來、主要是受蘇軾的影響。」とある。

(14) 錢鍾書『宋詩選註』一五九頁に、「請看他(楊萬里)自己的話:『詩固有以俗爲雅、然亦須經前輩取鎔:』」とあり、また、「他用的俗語都有出典、是白話裏比較『古雅』的部分。」とある。なお、『宋詩選註』の讀解に際し、宋代詩文研究會譯注『宋詩選注(1~4)』(東洋文庫、平凡社、二〇〇四~二〇〇五)を参照した。